

古着支援プロジェクト

●第19回 2011年度 古着支援要項

■ 2011 年も以下の要項に従って古着を集めます。ご協力、よろしくお願いいたします。

■ 送り先と受け付け期間を間違えないようにお願いいたします。

■ 衣料品以外のものは対象外ですので御了解ください。

◎支援先(予定): タイにあるミャンマー難民キャンプ

◎古着の種類: とくに5才以下の幼児の衣類が必要です。子供と大人の衣類(夏冬のすべて)ズボン、Tシャツ、スカート、ワイシャツ、ジーパン、背広、トレーナー、ジャージ、カーデガン、セーター、コートなどタオル、シャツも可

不可なもの: 靴下、ハンカチ、下着、靴、ベルト、ぬいぐるみ、バック、帽子、ネクタイ

◎古着の状態: 洗濯に出したもの、あるいは自分で洗濯してアイロンをかけたものにしてください。

◎古着の個数: ダンボール箱、6000 個(40 フィートコンテナ 6 台)



2011 年の募金目的と目標額

- 難民、国内避難民ほか支援 760 万円
古着などのコンテナ費用
- ミャンマー学生寮支援など 120 万円
- カクマ難民キャンプなど 120 万円

募金目標額 1000万円

募金の送金先

郵便振替口座
わかちあいプロジェクト募金
00130-7-762258

2010年わかちあいプロジェクト古着支援配布報告

難民キャンプ名	配布 箱数	配布地域
SITE 1	600	Bann Nai Soi godown,
SITE 2	150	
MHS-ATV	20	
MAE RA MA	650	KKP godown, A.Mae Sariang,
MAE LA OON	650	
MSR-ATV	20	
MAE LA	1,459	Mae La
UMPIEM	600	Umphiem
NU PO	600	Nu Po
MST-ATV	35	KRC Mae Sot
DON YANG	180	KRC Sangklaburi
THAM HIN	300	Tham Hin
KAN-ATV	20	KRC Sangklaburi
Total	5,284	

2010 年古着支援にご協力くださりありがとうございます。5284 箱が寄せられました。左に記しています 13 のタイのミャンマー難民キャンプに 40 フィートコンテナ 6 台を支援いたしました。(TBBC)

◎送り先: 140-0003 東京都品川区八潮 2-9

大井物流センター ジャパンエクスプレス内

わかちあいプロジェクト Tel.03-3790-9672

(現地への持ち込み可、宅配業者の選択は自由です)

◎受付期間: 2011 年 6 月 1 日(水) ~ 6 月 10 日(金)

(10 日間、この期間に到着するようにお送りください)

◎ダンボール箱の大きさ: 引越し用段ボール箱大のおおきさまで(縦・横・高さの合計が 1.5m まで)

◎送料募金: ダンボール 1 箱あたり、1500 円

(古着の寄付だけは受け付けていません。送料カンパを条件としています。荷物と一緒にカンパを送られますと、そのまま現地まで送られてしまいます。ご面倒ですが郵便振替でご送金ください)

●募金送金先

郵便振替口座名称: わかちあいプロジェクト募金
口座番号: 00130-7-762258

(古着送料募金とお書きください。振替用紙は郵便局にあります) クレジットカードで募金ができます

◎現地受入団体: TBBC
Thailand Burma Border Consortium
<http://www.tbtc.org/>

わかちあいプロジェクトNEWS 26

2010 NOVEMBER (年1回発行)

編集・発行 / 松木 傑

デザイン / Design Convivia

わかちあいプロジェクト

130-0022 東京都墨田区江東橋 5-3-1 電話: 03-3634-7809 FAX: 03-3634-7808

郵便振替口座: わかちあいプロジェクト募金
わかちあいプロジェクト

00130-7-762258 (募金用)
00180-6-758331 (代金支払用)



わかちあいプロジェクト

フェアトレードは世界の豊かさを分かちあい共生する経済のしくみです

わかちあい プロジェクト NEWS No. 26

2010 NOVEMBER

ミャンマー カヤー州 ペコの子供たち



ミャンマー、ペコまでの 道のり

松木 傑 わかちあいプロジェクト代表

2008 年から教育支援として取り組んでいます学生寮とそれを支える農園があるのはミャンマーのヤンゴンから直線距離にして 375 キロのペコの町はずれです。東京ー大阪が 400 キロですので、ほぼ同じ距離です。9 月 6 日午前 11 時に成田を出発して、タイのバンコックを経て、同じ日の夕方にヤンゴンに着きました。翌日、早朝、ヤンゴンから飛機行で、カヤー州に飛び、近くのカローの町に一泊することになりました。翌朝、5 時、20 年はたっぴいそうなトヨタの乗用車に乗って出発し、ペコの農園に着いたのは 11 時ころでした。2 時間ほど関係者と懇談し、農園の状況、コーヒー栽培の様子など見て皆さんと昼食

を食べて、すぐにカローまで引き返し、そこでさらに一泊して、翌日、ヤンゴンまで帰りました。なんと 375 キロの地点に 2 時間滞在するために、2 泊 3 日を要したのです。

このことは現在のミャンマーの状況を象徴しています。軍事政権下で海外との交流が閉ざされ、経済発展から取り残されています。そのため道路が極端に整備されていないためです。あるいは意図的に道路を整備しないのが軍の方針なのかもしれません。また、移動の自由が許されておらず、外国人は許可なく訪れることができない地域があるため、ペコは不許可の地域内にあります。

カヤー州は反政府のグループが武装している地域で、現在は休戦中であるから危険であるというのがその理由です。そのためペコの町に泊まることができないため、その日のうちに引きかえすことになりました。取得した土地に学生寮とコーヒー農園をつくるのが当初からの計画ですが、政府の許可が得られなくて計画が中断しています。そこでそれに代わる教育支援プロジェクトとして、すでにペコの町にある学生寮を財政的に支援して、新たに3名のスタッフを雇用することにいたしました。これで子供たちの身の回りの世話ができて、40名の子供た



カローの学生寮

歓迎の踊りを踊っています。
個人で建物を借りて寮母さん一人で運営しています。
一人の寮母さんの人件費は月50ドル
年間でも5万円～6万円
その他の費用も含めて年間10万円

ちを新しく受け入れることができます。村には小学校は不十分ながらありますが、中学校に行くためには町に出なければなりません。そのために学生寮はなくてはならないのです。

では、さっそくその学生寮を見に行きましょうと、私が言ったときの、皆さん

の困った顔が忘れられません。聞くと町の入り口で検問され、入ることができないのです。

もう少し顔が日焼けして、ミャンマー人と区別がなければとか、農園は湖の近くにありますが、泳いで行けば皆と冗談を言い合いました。



集まってくださったバプテスト教会のみなさん



ペコの学生寮のこどもたち



インパール作戦 (1944年3月8日～7月3日)

日本兵が歩んだ道—国道54号—

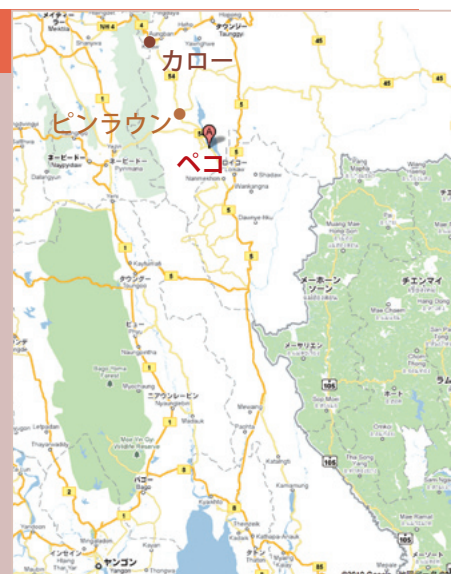
インドのインパールを攻略するために参加した日本軍、約8万6千人のうち戦死者3万2千人余り(そのほとんどが餓死者であった)、戦病者は4万人以上を出した。

「徒歩部隊や駄牛部隊は、カローから東へ約1日行程をすぎて南に折れ山道にはいり、ピンラウン経由でロイコーに直接向かった。この方が距離も少なく、時間的にも早いのであるが、途中はずっと丘陵地の連続である。

このころは夜行軍にかぎられていた。装具はすべて牛車に乗せ、兵士は牛車のあとを歩いていく。牛車の前進が困難になったり、牛が弱ってくると、みんなで牛車を後押しせねばならなかった。牛を制御する兵士の努力も、眠い終夜のことのゆえに大変なのはもちろんであるが、後から眠りながら、ふらふらついていく我々も、今思えばぞっとするほどの辛さであった。土に起き、土に寝る将兵の身体の色も顔色も、黄色、

青色、土色をまぜたような色であった。」(平久保正男著「真実のインパール」)

カローからピンラウンまで4回宿営しているようですから、ペコの町を通り過ぎるには6日ほどかかったものと思われます。私たちの農園に隣接する国道54号を戦争に敗れた日本の兵士が歩まれたと思うと複雑な思いになりました。このたび集まってくださった方たちの中にも13歳で少年兵であったといわれた方もおられます。上記の本ではゲリラとして恐れられています。



手前 国道54号 車の向こう側が農園

ミャンマー難民キャンプ訪問

9月15日にはバンコックから小型飛行機で、メソットまで移動し、TBBC (Thailand Burma Border Consortium) タイのミャンマー難民を支援する国際 NGO、わかちあいプロジェクトの古着支援の現地パートナー)のスタッフの案内で、去る9月28日に日本に定住した難民の人たちに会って励ますために訪問しました。

当日は5家族の内、2名の家長の男性が来てくれました。何度もインタビューされて辟易しているようで、緊張しているようでした。日本でのコンタクトもなく、情報も限られているようで、よけいに不安になっているようでした。

仏教徒3家族、クリスチャン2家族だとのこと。東京のカレンのコミュニティーについて、情報を調べてTBBCの担当者を通して、彼らに知らせてあげています。

彼らが難民キャンプを離れて日本に定住したい第一の理由は、キャンプでは将来の希望が持てず、子供に十分な教育を与えた



左からチャーセンさん 36才とエーレアさん 24才



ラナカフェスタッフ

右側3人目クアさん 4人目ノイさん

ミャンマーからの出稼ぎ、店が協力して労働許可を取っています。

いと願ってのことです。

今回、ミャンマーとタイを訪問して伝聞による情報もあってどれだけ正確かわかりませんが、ミャンマー難民についていろいろと考えました。

国際社会が支援して、第三国定住を進める目的は、海外に移住することで、難民を支援するとともに難民キャンプを縮小することでした。

しかし、すでに約6万人が移住しましたが、相変わらず難民キャンプの人口は約14万人と変わっていません。

また、タイには約300万人(?)あるいはそれ以上のミャンマー人が労働許可をえて合法的に、あるいは不法に滞在している現実があります。

わかちあいプロジェクトが始めたチェンマイのショップの従業員、6名中2名はミャンマーからの出稼ぎで、その一人は、郷里からほとんどタイに来て働いていると言っていました。

勿論、難民は、国境の紛争地域で家を焼き払われたりして逃げてきた人たちで、難民キャンプに留まる事がタイ政府によって求められ監視されています。そのため難民キャンプに留まり続けるか、第三国に移住するしか方法がないというのも現実です。

第三国定住がはじまると、タイ国内で生活していたミャンマー人が、難民キャンプに戻り、ヨーロッパなどの受け入れ国に移っていったケースがあると聞きました。

以上が正しい認識であるならば、第三国定住以外に、タイ国内で労働許可を得て仕事をする、というもう一つの方法はないのでしょうか。タイ政府の方策にかかっていますが、それをサポートするほうが、日本に定住するより、言葉の面、生活習慣の面など、タイのほうがより生活しやすいのではないかと思います。

私が2人に会った感じでは、日本で生活するのは相当苦労するのではないかという印象を持ちました。

難民の人たちの希望に沿う選択はどこにあるのでしょうか。

11月にミャンマーでは選挙が実施される予定です。変化の兆し、きっかけになればと願うばかりです。

難民キャンプの人たちは長い人では30年以上、故郷に帰る事を願って待ち続けています。

ミャンマーの教会



ヤンゴンのルーテル教会

ミャンマーは人口5300万人、ビルマ族(約70%)とその他多くの少数民族で成っています。宗教は、仏教(90%)キリスト教(4%)その他イスラム教など(6%)です。

その4%のうちバプテスト教会3%、カトリック教会1%、その他、聖公会などがあります。

ルーテル教会はイギリスの植民地時代にインドから移り住んだ人たちが最初に教会をつくりました。

1998年に設立され、牧師12名、伝道者27名 教会数24がMyanmar Lutheran Church (MLC、会員2150名)と1995年に活動を始めたのがLutheran Church of Myanmar (LCM、1650名)です。

教会の違いは所属民族の違いによるもので、MLCはチン族で主たる活動地域はチン州のPaleva周辺、LCMはサガイン管区でミゾラ属です。

MLCの教会は、アンドルー・ロネ牧師によって始められましたが、もともと彼は聖公会の牧師でした。

さらに勉強したいという思いで参加した訓練プログラムがルーテル教会によって主催されたことが、ルーテル教会との出会いでした。



アンドルー・ロネ牧師とジェームズ牧師

彼は2011年度のアジア学院での農業指導者訓練プログラムに申請中です。